

令和 6 年 5 月 26 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00486

研究課題名（和文）十九世紀フランス哲学における身体観の再検討：『未来のイヴ』の新たな読解にむけて

研究課題名（英文）Reexamination of Body image in 19th-Century French Philosophy: Towards a New Interpretation of "L'Eve future" de Villiers de l'Isle-Adam

研究代表者

福田 裕大（FUKUDA, Yudai）

近畿大学・国際学部・准教授

研究者番号：10734072

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：思想史研究において未開拓の領域である十九世紀のフランス哲学を再検討することが、この時代の文学研究に新たな展望を拓くものであることを実践的に示すためのケーススタディとして、ヴィリエ・ド・リラダンの小説作品『未来のイヴ』の再検討を行なった。具体的には、十九世紀フランス哲学の問題系のなかでも、とくに哲学と生理学の出会いを端緒として生じた身体観の変容に着目し、この変化の過程を展望する作業を土台とすることによって、『未来のイヴ』を従来とは異なるしかたで読み直し、同作に秘められた現代性を再発見することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

AIに代表される新しいテクノロジーが現代社会のあり方を大きく変えようとしているなかで、本研究が扱う「19世紀フランス哲学」と「『未来のイヴ』」というふたつの歴史的対象には、私たちがいきる「いま」を再検討するためのアクチュアリティが秘められている。本研究は、フランス文学ならびにメディア史、思想史といった学術分野において専門的貢献を果たしうるだけでなく、「見落とされがちな過去の事象を精緻に観察することによって、それらが持つ現代的意義を再発見する」ことを実現している点において、この現代社会のなかで人文学が担いようとする意義／価値を再考するためのケーススタディにもなっている。

研究成果の概要（英文）：19th-century French philosophy has not been explored in conventional history of ideas; accordingly, this study reexamined Villiers de L'Isle-Adam's novel L'Eve future to demonstrate that new prospects for research on French literary works of that era can be opened up by reexamining this field. More specifically, focusing on changes in the concept of the body that started with the meeting of philosophy and physiology, we reread L'Eve future that was written on the basis of these changes, allowing the contemporary significance hidden inside this work to be rediscovered.

研究分野：フランス文学、メディア史

キーワード：ヴィリエ・ド・リラダン 『未来のイヴ』 19世紀フランス哲学 象徴主義 科学と哲学 身体 精神 医学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

十九世紀フランス哲学は、これまでの思想史研究において十分に開拓されてきたとは言い難く、多くの場合数名のビッグ・ネームたちに目配りをなすだけで、足早に通り過ぎられてしまうことが多い領域であった。こうした弱さは隣接領域であるフランス文学研究の世界にもそのまま反映されており、かの国の十九世紀文学を研究する者が同時代の哲学の動向を十分に把握しているかという点、現状では否定的に回答せざるを得ない。時代を前後する十八世紀や二十世紀のフランス文学研究においては、同時代の思想的動向をめぐる高度な理解のうえで作品研究が重ねられているにもかかわらず、十九世紀文学に関してはこうした哲学との连接的ヴィジョンがほとんどないままに、個々の作品が論じられているというのが実情である。

一方で、本研究計画の代表者（以下、「代表者」）は、シャルル・クロを対象としたこれまでの研究を同時代の文脈へと拡張しようとするなかで、十九世紀フランス哲学が構成する問題系の広がりや幾度も目の当たりにしてきた。とりわけ近年は、クロの近い友人であり、本研究の中心を占めることにもなるヴィリエ・ド・リラダンへと関心を寄せてきたこともあり、後者の作品に描かれる様々な「身体」の背後に、同時代の哲学の動向が深く関係していると感じ取ってきた。しかしながら、作家名を単位にしたこの種のミクロな研究をどれほど重ねても、この時代の哲学をめぐる研究の積み重ねが決定的に不足している、という現状に突き当たることに変わりはない。こうした根本的な問題点を改善するために、代表者は関心を同じくする研究者たちと研究グループを立ち上げ、当時の思想家たちのテクストを精読する作業を重ねてきた。

2. 研究の目的

本研究を支える根本的な問題意識は、十九世紀フランス哲学に関わる知識を確かなものとする点で、この時代の文学を対象とした研究に新たな展望を拓くことにある。とはいえ、こうした問題意識はそれ自体として非常に巨大であるため、今回は代表者の専門に近い圏域から以下の二つの目標を設定し、まずは現実的に達成可能なひとつのケーススタディを行うこととした。第一に「十九世紀フランス哲学に関連する問題系のなかでも、とりわけ「身体観の変容」という問題に着目し、この問題に関わる思想史的な動向を跡づけること」、第二に「この「身体観の変容」を最もダイナミックに表現した作品として、ヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』を複数の角度から検討し、その結果を①の成果と有機的に接続すること」の2点である。これらふたつの目標の詳細は以下の通りである。

目標1. 十九世紀フランス哲学における身体観の変容を捉える：

十九世紀のフランス哲学といえば、当初はひとつ前の世紀に花開いた感覚論の哲学が残存していた時代である。周知の通り、その開祖たるコンディヤックは、人間が有するとされる生得観念を否定したうえで、原初的な感覚の成立を端緒として様々な能力が作り上げられていく過程を跡づけようとした。こうしたコンディヤック主義の余波のもとにあった世紀初頭のフランス哲学は、人の身体を問題化する際に、いまだ「内観」（思索を通じた内部観察）と呼ばれる思考法を保持していたことを特徴とする。ところが、世紀の半ばを迎えるにつれて、こうした伝統的なスタイルの哲学に医学・生理学の知が入り込んでくるようになる。すなわち、解剖にもとづいて身体のうちがわを直接観察することを旨とした身体知であり、こうした新たな動きを受けて、世紀中葉以降のフランス哲学は、自らの思索のスタイルを大きく変えていく。知覚、意識、精神といった伝統的な哲学のテーマが、客観的な身体観察の成果をもとにして再論されるようになるのである。

冒頭でも述べた通り、従来の思想史において十分な評価を得られていない十九世紀のフランス哲学は、こうした「哲学と医学／生理学の出会い」という歴史的出来事を証言するものとして、極めて重要な意義をもっている——例えば1860年に書かれたリトレの論考はこの点で非常に重要である（« De quelques points de physiologie psychique »）。本研究では、この時代に書かれた複数の哲学的著作

を実際に精読することによって、こうした「出会い」が生じる過程をいっそう精緻に跡づけるとともに、そのことによってもたらされた身体観の変容、ならびに身体に関する言説の揺らぎを具体的なレベルで拾い上げていく。

目標2：ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』の身体観を再検討する：

ヴィリエ・ド・リラダンは多くの文学史において「科学」や「実証主義哲学」に反抗した作家として紹介されることが多い作家である。だが実際には、シャルル・クロと極めて近い知的人脈のなかに身を置きつつ、当時の先端的な科学・哲学に強い関心を寄せていたことが見て取れる。とりわけ『未来のイヴ』という作品は、その文章の半分以上とも思える分量を件の人造人間「ハダリー」の身体描写に割いており、それら一連の記述のなかには身体をめぐる同時代の知との深い繋がりを感じさせるものが認められる。例えば、ハダリーの「原型」となるアリシヤ・クラリーの身体が、写真や録音技術をはじめとする記録・計測機器によって客観的にデータ化されうる、との想定がある。あるいは、人の神経系を思わせる金属線のネットワークが、人造人間の各部位を連関させて、ひとつの身体機能を生み出していく過程を執拗に描写するパートも存在する。一方で、こうした当世の神経生理学に通じる身体理解を積極的に取り込むようでありながら、同じく一世を風靡していた心霊主義・神秘思想に通じる概念が本作には頻出している。作品末尾で唐突に展開される「ソワナ」（ある女性の霊的／無意識的人格）の憑依をめぐるエピソードは、それまでに幾度も強調されてきたハダリーの機械的＝自律的な身体のあり方と真っ向から対立するものだ。

このように見てみれば、『未来のイヴ』は単純な「科学風刺小説」などではなく、当時のフランスで生じていた身体観の揺らぎをめぐる複数の声を随所に配置した、ポリフォニックな身体論として読むことが可能である。本研究では、異本の検討を含めた同作の精読、ならびに、「目標1」に記述した作業の成果を基盤的知識として活用することによって、こうした新たな『未来のイヴ』読解の可能性を開拓する。

3. 研究の方法

代表者である福田は、従来の研究が目を向けてこなかったマイナーな事象にあえて目を向けることによって、一般的な文学史の説く定説を相対化・複数化しようとする実践を重ねてきた。今回の研究においても、まさに「十九世紀フランス哲学」というマイナーな事象に目を向けることが調査の端緒となるが、ここまで行ってきたシャルル・クロ研究から得られたノウハウを最大限に活用して、従来の巨視的展望によっては組み尽くせない「差異」にあたるものを発掘する役割を担っていく。

一方で、「十九世紀フランス哲学」という対象はそれ自体として極めて大きく複雑な問題系であり、なおかつ代表者の専門とは異なるディシプリンに属している。こうした問題に対処するために、本研究は、研究上の関心の近い、しかし異なる専門分野を持った研究者たちとのあいだで密接な協力体制を築いていく。具体的には、ラカン研究を核にしつつ、近代フランス哲学史・精神医学史について豊かな研究実績をもつ上尾真道、ならびに、演劇を中心とした芸術理論を専門としつつも、十九世紀の身体論や心霊主義などに固有の関心を向けてきた中筋朋は、いずれも代表者一人の力では獲得し得ない貴重な知見をもたらしてくれるだろう。

加えて私たちは、方法論の面でもラディカルな問い直しを計りたい。文学とその隣接領域にある言説との接続を試みる研究はこれまで無数になされているが、私たちの研究は、十九世紀という時代の歴史的状況を重視して、文学と哲学という（こんにちの目からは分断されて見える）二つの言説の領域を、あえて相互浸透的なものとして捉えてみたい。こうした方法論的刷新を実現するために、本研究にはフーコーの言説研究の特性を研究してきた相澤伸依が参加しているほか、京都大学人文科学研究所が主催する共同研究班（「ポスト＝ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義」）の各メンバーと

も積極的な連携を図っていく。このように、自ら設定した目標を達成するために必要な知識の持ち主と確実に連携し、有機的な共同作業を目指していることも本研究の独創性・創造性である。

以上のような体制をもとにして、初年度と第二年度は基礎研究のために年に複数回の研究会を実施し、それぞれの役割に応じた研究成果の報告を進めていく。また、最終年度には一連の研究の流れを総括するシンポジウムを開催し、最終的な成果を書籍として刊行するための準備を整えていく。

4. 研究成果

2020年度：

研究初年度は、コロナウイルスの流行のために移動そのものが困難な状況にあったため、研究グループ内で定期的なオンライン研究会を実施することに注力し、翌年度以降に向けた基礎的調査を重ねた。開催した研究会は計8回にのぼる。具体的には、初回の会でプロジェクトの全体像を概観するための確認作業を行ったのち、大きく分けて以下の3つのレベルにわたる調査報告がなされた。第一に、本研究の中心的対象である『未来のイヴ』という作品、ならびに、それを生み出したヴィリエ・ド・リラダンという作家についての理解を深めるための作業である。この点については、代表者である福田が時代背景を含む研究対象の歴史像を共有するための報告を行った(第1回、第5回)。加えて、『未来のイヴ』という作品そのものについては、生成論的アプローチから作品の成り立ちを再確認したほか(第4回)、中筋が時代背景の検証とテキスト分析を複数回にわたって実施した(第3回、第5回、第8回)。第二に、本研究のもうひとつの軸である19世紀フランス哲学の再検討に関わるものとしては、代表者が元々の専門であるシャルル・クロ研究の知見を活かしつつ、ヴィリエ周辺で流通していたと思しき哲学的言説を整理する作業を行なったほか(第7回)、精神医学史を専門とする上尾から、主に同時代のヒステリー研究との関連性を論じる報告がなされた(第2回、第5回)。最後に、文学とそれ以外の言説領域を横断して研究をおこなう本研究に固有の方法論を模索する作業として、フーコーを専門とする相澤からこの思想家の考古学・系譜学を援用する可能性について問題提起がなされた(第6回)。

2021年度：

第二年次にあたる本年度も、コロナウイルスの流行のために移動そのものが困難な状況にあったため、定期的なオンライン研究会を実施することで研究活動を進めた。具体的には、前年度から進めてきた『未来のイヴ』再読のための論点整理の作業を行なったのちに、同作品をいっそう細かなレベルで具体的に検討していくための精読作業を行った。とりわけ、8月から9月にかけて集中的に実施した同作の草稿分析は、本研究にとって大きな実りとなった。

以上のような基礎的作業をもとにして、10月に日本フランス語フランス文学会のワークショップとして、共同発表「『未来のイヴ』を再読する：十九世紀フランス哲学・科学を起点として」を行なった。フーコーの言説理論をもとにした『イヴ』再読の可能性の提案(相澤)、「エジソンの逆説的アンドレイド」を中心とした草稿分析(野田)、『イヴ』にみられる特殊な現実理論の再整理(福田)、同時代の哲学・精神医学とのつながり(上尾)、「光と闇」の分析を起点とした読解(中筋)等の多彩な問題提起が有機的に結びついた、有意義な成果報告の機会となった。

2022年度：

第三年次にあたる本年度は、前年度から進めてきた『未来のイヴ』再読のための論点整理の作業をもとにして、白水社の『ふらんす』誌上で半年にわたる雑誌連載の機会を持つことができた。さらには、この連載がインパクトとなり、同誌9月号において特集記事「21世紀に『未来のイヴ』を読む」の企画制作を担当することができた。同特集においては、『未来のイヴ』の精読の結果得られた知見を、作品が書かれた同時代の文脈と、私たちの生きる現代の文脈双方と照らし合わせながら、同作の

持つアクチュアリティを問い直す鼎談型記事を執筆したほか、同記事にて話題に上がった重要なトピックを二点の小論として論述した。

以上一連の成果公表をうけて、京都大学人文科学研究所の主催する公開シンポジウム「人文研アカデミー」の企画の一つに本研究班のメンバー三名が招待され、シンポジウム「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義：『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」においてコメンテーターを務めた。同シンポジウムは、水声社よりヴィリエの『残酷物語』の新訳を刊行した田上竜也氏、ならびに『未来のイヴ』の新訳を準備中の木元豊氏を講演者とするもので、本共同プロジェクトの研究成果はここでも十分な現代性を備えていることが確認された。

これらに加え、代表者である福田が、中国の南京大學より招待を受け、講演「フランスに見る黎明期の録音技術」を行ったほか、上尾真道による論考「フロイトのダイヤモンド」(上/下)が発表された。いずれのものも、19世紀後半のフランスで生じた哲学・科学的パラダイムの変容を捉えることを問題意識の一端に据えており、その意味で『未来のイヴ』に関する分析をなす際の基盤的知識になりうるものである。

2023年度：

ここまでの研究成果を総括するための企画として、シンポジウム「催眠とアンドロイド：ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』をめぐるふたつの会話」(2023年12月16日/於:京都大学人文科学研究所)を開催した。この機会に発表された本研究の最終的な成果は以下の通りである。

まず、従来の研究において「反=科学」的と形容されてきた『未来のイヴ』は、むしろ同時代の科学的言説を大量に取り込むことで成立しており、この特徴を無視することはできない。次いで、作中で繰り広げられる人造人間「ハダリー」に関する科学的描写を読み込むと、このアンドロイドに関する作中の説明が複数に分裂していることが見えてくる。とりわけ、創作の最終段階で付け加えられたソワナの存在は、それ以前に書かれていた人造人間のあり方と真っ向から対立しており、その意味で大きな矛盾をなしている。けれどもこの矛盾は必ずしも作品にとっての瑕疵ではなく、むしろそうした矛盾があるからこそ、『未来のイヴ』という作品はひとつのテキストのうえに複数の物語を共存させるような多声的作品として存立することができる。さらにいうとこの作品は、同時代の様々な知を共存させているという意味でも多声的であり、例えば実証科学と心霊科学のような対立的な知でさえも、それぞれの異質性を抹消することなしに自身のうちに取り込んでいる。こうした意味での矛盾/多声性を否定することなく、それらがテキストのうえでどのように存在しているかを観察する作業を基盤としてこの作品の実態を捉え直したことが、本研究の成果である。なお、上記のシンポジウム終了後、以上の成果を書籍化するための準備をすでに進めており、年度終了時点で計画されている全体のおよそ7割を執筆済みである。同書については、2024年度に公募される科研費「研究成果公開促進」に申請し、2025年度中の刊行実現を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福田 裕大, 野田 農	4. 巻 97(4)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 裕大, 上尾 真道	4. 巻 97(5)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 裕大, 中筋 朋	4. 巻 97(6)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(3)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道, 井上卓也	4. 巻 97(7)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(4)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中筋朋, 上尾真道	4. 巻 97(8)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(5)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中筋朋, 宇佐美達朗	4. 巻 97(9)
2. 論文標題 対訳で楽しむ 未来のイヴ(6)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 裕大, 上尾 真道, 中筋 朋	4. 巻 97(9)
2. 論文標題 鼎談「現実2.0」の論理と現代テクノロジー : 『未来のイヴ』再読	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上卓也	4. 巻 97(9)
2. 論文標題 『未来のイヴ』と力動精神医学史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 1180
2. 論文標題 フロイトのダイモン(上): 転移の彼岸における神話と思弁	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 112-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上尾真道	4. 巻 1182
2. 論文標題 フロイトのダイモン(下): 転移の彼岸における神話と思弁	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 176-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田裕大・野田農・相澤伸依・上尾真道・中筋朋	4. 巻 29
2. 論文標題 ワークショップ報告「『未来のイヴ』を再読する: 十九世紀フランス哲学・科学を起点として」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『cahier』(日本フランス語フランス文学会ニューズレター)	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上卓也	4. 巻 3
2. 論文標題 メイエルソンの心霊研究論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Ignis	6. 最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田上竜也, 木元 豊, 中筋 朋, 福田裕大, 野田 農
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義 『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの
3. 学会等名 人文研アカデミー（京都大学人文科学研究所）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 フランスに見る黎明期の録音技術
3. 学会等名 南京大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中筋朋
2. 発表標題 『未来のイヴ』の考古学
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第9回:2021年5月8日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 『未来のイヴ』第二巻を読む
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第10回:2021年6月19日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野田農
2. 発表標題 『未来のイヴ』のテキスト生成過程に関して(1)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第10回:2021年6月19日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野田農
2. 発表標題 『未来のイヴ』のテキスト生成過程に関して(2)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第11回:2021年7月17日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相澤伸依
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(1)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第13回:2021年8月11日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(2)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第13回:2021年8月11日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上卓也
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(3)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第14回:2021年8月18日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(4)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第15回:2021年月25日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中筋朋
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(5)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第16回:2021年9月1日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野田農
2. 発表標題 ヴィリエ・ド・リラダン「エジソンの逆説的アンドレイド」を精読する(6)
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会(第17回:2021年9月9日)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田裕大・野田農・相澤伸依・上尾真道・中筋朋
2. 発表標題 『未来のイヴ』を再読する：十九世紀フランス哲学・科学を起点として
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会 2021年度秋季大会ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井上卓也
2. 発表標題 流体と媒質：未来のイヴを読み解くためのいくつかの手がかり
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第18回：2021年12月12日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 「『未来のイヴ』の再検討に向けて：19世紀フランス哲学を起点として」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第1回：2020年7月18日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 「『未来のイヴ』は「ヒステリーの時代」の作品か？」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第2回：2020年8月22日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中筋朋
2. 発表標題 「『未来のイヴ』：科学者エジソン / 魔法使いエジソン」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第3回：2020年9月19日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 「音声文化からみるヴィリエ・ド・リラダン」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第5回：2020年11月21日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上尾真道
2. 発表標題 「十九世紀催眠：神経関連小史」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第5回：2020年11月21日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中筋朋
2. 発表標題 「詩論 / 身体論の交差点としての象徴主義小史」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第5回：2020年11月21日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相澤伸依
2. 発表標題 「フーコーの方法論：考古学と系譜学」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第6回：2020年12月19日）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田裕大
2. 発表標題 「シャルル・クロ周辺から見る19世紀フランス哲学小景」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第7回：2021年1月30日）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中筋朋
2. 発表標題 「『未来のイヴ』読解（1）：人形、光、哲学者 - 錬金術師 - 科学者」
3. 学会等名 十九世紀フランス文学・哲学研究会（第8回：2021年3月13日）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	上尾 真道 (UEO Masamichi) (00588048)	京都大学・人文科学研究所・研究員 (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中筋 朋 (NAKASUJI Tomo) (70749986)	京都大学・人間・環境学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	相澤 伸依 (AIZAWA Nobuyo) (80580860)	東京経済大学・全学共通教育センター・教授 (32649)	
研究分担者	野田 農 (NODA Minori) (20907092)	早稲田大学・理工学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	井上 卓也 (INOUE Takuya) (30916515)	東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関